

同題作文における漢語表現の発達

お茶の水女子大学附属小学校 村上 博之

同 中学校 田中 美也子

本研究は、サンプルとして、小学生から大学生に至る各学年40、計520編の同題作文（「手」-1992.12～1993.1）を対象とし、作文能力の発達に関して、主に語彙の習得および拡充の視点から調査研究することをねらいとした共同研究である。

これまでに、本研究の第一段階としてのサンプル作文の定量的分析の方法とその結果を「作文能力発達に関する縦断的研究 その一」としてまとめ報告した（『国語科教育』42集参照）。すなわち、基礎データの作成に関する事項、文の長さにもみる変化、文節総数と異なり語数にもみる変化-辞書量の変化、品詞別出現度数の変化をとりあげて考察したものである。

今回の発表では、同研究における定性的分析の一項目として漢語表現の発達に着目した。同題作文における漢語表現として、

- ①名詞における漢語
- ②サ変動詞における漢語（漢語+する）
- ③形容動詞における漢語

をとりあげ、それぞれにおける各学年使用語数、初出異なり語の抽出から分析を試みた。

以下の3点を分析の観点とした。

- ①上級に進むにつれて、漢語表現の使用数と使用例はどのように変化していくか。
- ②定量的分析結果における品詞別出現度数の変化との関わりはどうか。
- ③使用例にもみる学年の傾向と特色はどうか。

以上の内容から、漢語表現の習得および拡充が、語彙面における作文能力発達に関して一つの要因になるであろうことを検証しようとするものである。